



↑がんの検査中、何かに打ち込みたくて書いた『平成の炭坑節』。8作品応募したうち2作品が選定され、11月6日に田川市で開催されたコールマイン・フェスティバルで、永末さん作詞の歌詞が曲にあわせて披露されました。藤高炭鉱(方城)での経験を思い出しながら「炭鉱の時代を語り伝えて行かねばならない」というメッセージを込めました。



↑ピラミッド・スフィンクスを背景に。



↑自分で撮った写真を模写するなどし、世界各国の光景を描いた絵。永末さんは「今後は内面的な絵にも挑戦したい」と話しています。

↓現在43冊目となった「English diary」。入院中の24日間は、その闘病の記録を記していきました。



経験から結びついた英訳

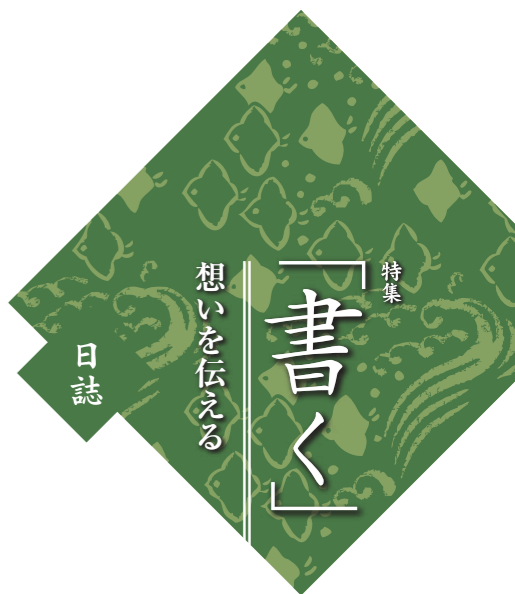
「世界を旅する中で、英語が話せないわたしは、とっさの時に伝えたいことも伝えられず、自分があまりに無力だと感じました。」
そんな永末さんは帰国後、70歳を機に、独学で英語を学び始めます。「English diary」は、左ページに毎日の想いが綴られ、右ページにその英訳を、辞書を片手に記すという「英語日誌」。

「年をとると多くのことを忘れてしまふけれど、自分がその日何を感じ、何を考えたのか…それを、英語を学ぶと同時に『生きた証』として残しておこうと思っただけです」と永末さんは語ります。

死と向き合った闘病日誌

昨年の秋、順調に第2の人生を楽しんでいた永末さんを突然

世界一周旅行で残した102日間の記録、日々の想いを英語と日本語で記した日誌、24日間、がんと闘い生き抜いてきた証…。日ごろから「書く」ことに親しんできた永末重志さんが綴った文章をおとして、「書く」ことの力を探ります。



↑世界一周について「多くの人との出会いや、遺跡や大自然を目の当たりにすると、人生観がガラリと変わります」と永末さん。

世界一周への挑戦

「世界一周」それは我が人生最大の挑戦である。

永末重志さんが自身で製本した「世界一周紀行」の書き出しです。平成17年5月22日から8月31日まで102日間にわたり、中国、ベトナム、スリランカ、エジプト、イタリア、アイルランド、アメリカなど19か国を訪問した永末さん。目的は単なる観光旅行ではなく「挑戦」でした。

「当時69歳、古希を目前にして『これからの自分の生き方』を模索していました。この旅で何かを学びたい。そう考えたとき、まだ見ぬ風景や人々との出会いで生まれる感情の一つひとつを、書き留めていこうと思いついたので、『世界一周紀行の執筆』とい

まだ見ぬ風景や人との出会いで生まれる感情の一つひとつを書き留める。永遠とは一瞬の連続…。生きた証として子や孫に伝えたい。

永末重志さん



↑「翼を持ったライオン寺院」の前で。

う挑戦を決意した瞬間でした。」
永末さんは旅の途中、一日も欠かさずその日に感じたことを綴り続け、最終日には原稿用紙632枚分にもなった物語を持ち帰りました。製本された「世界一周紀行」は知人から知人へと回し読まれ、多くの人々がその貴重な体験談や考えに触れました。

に表すことで、自分の想いが整理されたのかもしれない。
奇跡的に転移も見られず、がんを見事克服した永末さん。今、永末さんは、また新たな挑戦を胸に秘めています。

「この闘病日誌は、まさにがんに打ち勝ったわたしの闘いの記録。これをまとめて、子や孫にも伝えたいと思っています。」

一瞬を永遠に残し、伝えようとする永末さん。そこに綴られた文字には、深い想いが込められていました。

わたしたちが日ごろ特別意識することが少ない「書く」という行動。古来から言葉が「言葉」と呼ばれ、神聖視されていたように、一人ひとりが記す文字には、その瞬間の自分が宿るのかもしれない。